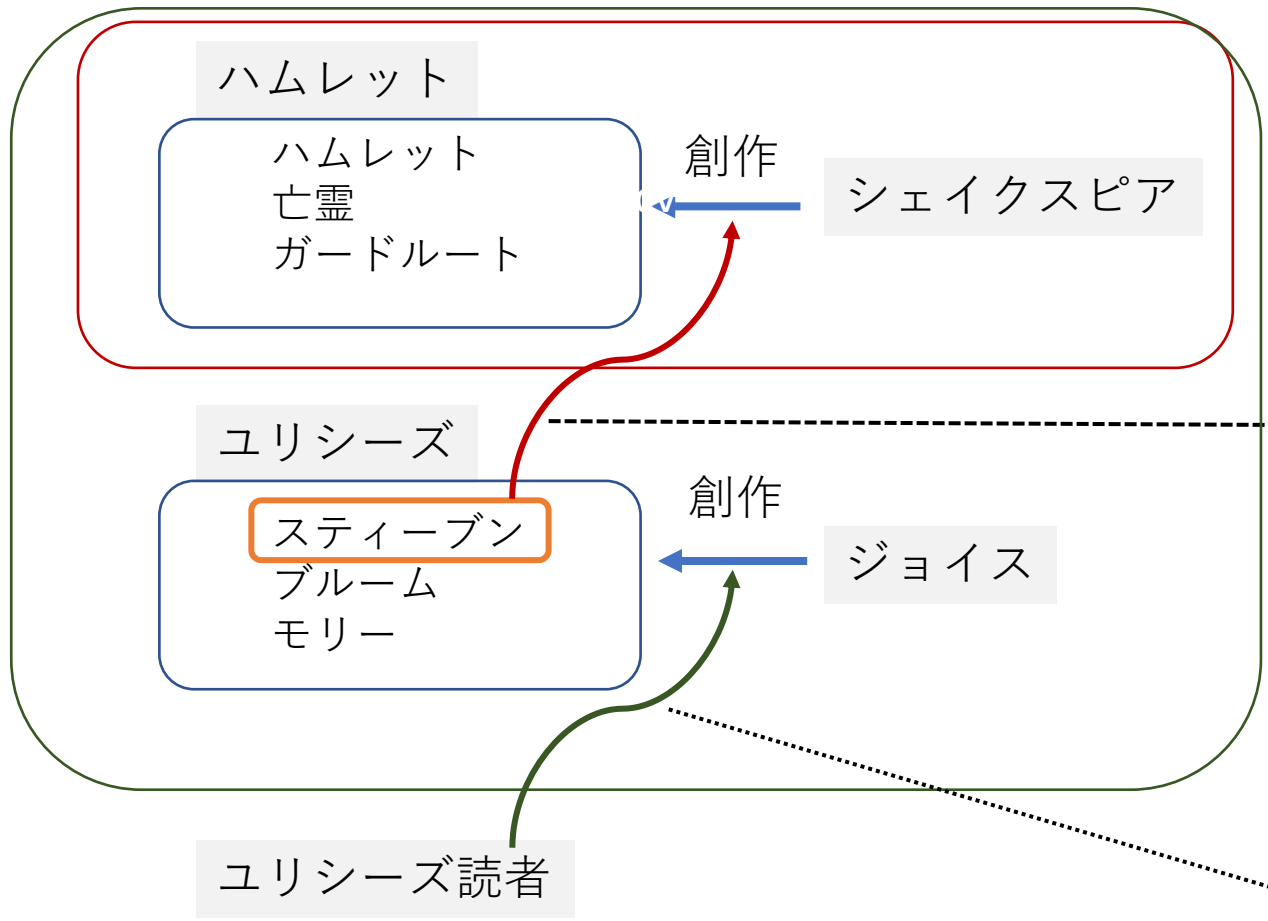


ユリシリーズ第9挿話の考察 (理科系の生活者目線での)

- ・ ・ あくまで素人の考察なので誤りがあるかと思いますがその場合はご容赦ください

読書をするということ

君は自分の説を信じているのかい？
—いえ、と、スティーブンは即座に言った (P.362)
⇒なぜスティーブンは自説が信じられないと答えたのか？



スティーブンはシェイクスピアの人生を通じて
Hamletという作品を解釈しようとしている
→しかし、それはシェイクスピアの人生の一部を自分にとって
都合の良い形で切り取った**恣意的**な物である
→このことを自認している以上、スティーブンは自説を完全に
信じることはできない

Hamlet = Stephen
Shakespeare = Joyce など第9挿話では
多くの**入れ子構造/相似の関係**が見られる
Hamletの読者であるStephenに対応
するにはStephenの読者である
"私達Stephen読者"

スティーブンとStephen読者が相似である以上、我々の読書体験は恣意的なものにならざる得ない

形相中の形相は不断に変化する形相のもとにある故に記憶によって俺である(P 325)

⇒どうということ???

アリストテレス哲学の意義：プラトンの哲学(イデア論)を現実的なもの＝形相、質料として移植した

イデア＝理想的な姿 形相：何であるか＝本質 質料：それである＝事実

⇒イデアから形相(本質)を取り出し、質料により眼前に示す

例：人が壺を作るときには、理想的な壺＝イデアから、壺を壺たらしめる本質＝形相を抽出し、粘土を用いることでそれを具現化する＝質料

ステイブンの考え

俺の本質＝形相とは記憶である

(第3挿話で意識が種々のイメージ＝質料に変容するステイブン

⇒これらの共通項は彼の記憶であり、それこそが彼の本質)



・シェイクスピア＝ハムレット父の亡霊ならば、登場人物と作者とは形相を同じくしており、登場人物とは一つの質料に過ぎない(＝複数の登場人物に作者が投影されていても不思議ではない)
⇒三位一体説

・現実態とは一つの質料である。我々の眼前に広がる現実は一つのあり方に過ぎない
⇒現実態と可能態、歴史と物語の関係

三位一体説

ー彼(シェイクスピア)は亡霊であり王子だ。彼は全てにおける全てだ(p360)

⇒結局、シェイクスピアって何だったの？

三位一体説：神、子(キリスト)、精霊の本質は同一である

→小説に当てはめると下図のようになる

	小説	ハムレット	ユリシーズ
神	作者	シェイクスピア	ジョイス
子	登場人物	ハムレット	スティーブン
精霊	担い手	亡霊(父)	ブルーム

*精霊=ブルームは
妻の貫通→ハムレットの亡霊と重なる
物語終盤にスティーブンを自らの後継者
として導くという点から

第9挿話のハムレット=亡霊=シェイクスピア、入れ子構造(シェイクスピアとジョイスは相似の関係)
およびアリストテレス哲学の形相と質料の関係から

スティーブンもブルームも三位一体説に乗っ取ればジョイスど同一ということになる

スティーブン：野心、反抗、芸術家(風)、アイルランド人⇒若き日のアイルランド人としてのジョイス

ブルーム：諦め(悟り?)、寛容、生活者、ユダヤ人 ⇒成熟した国際人としてのジョイス

父権、法的擬制、使徒継承(P352)⇒父から子へ役割を継承する

ハムレットでは父から子へ復讐劇が、

ユリシーズではブルームからスティーブンへ芸術の創作、モリーの性的対象という”役割“が継承されている
(第10挿話以降)

現実態と可能態

現実態：現実、事実の総体＝たったひとつ→**歴史**

可能態：あったかもしれない現実＝複数ありうる→**物語**

スティーブンにとって歴史とは**悪夢**である

悪夢＝アイルランドの征服された歴史

カトリックを押し付けられた幼少期/母の死の床

歴史＝現実態 は時の支配者、ヒーローが築きあげた”偉大なる”軌跡ではある

ジョイスはそのヒーローとは対極にある市民や生活者の物語＝可能態 を描くことで悪夢である歴史に抗おうとした

ユリシーズという作品は1904年6月16日のダブリンの生活者の可能態を描いた書

その他のメモ

スキュレとカリュブディス

- ・アイデア論とリアリズムなど第9挿話には多くの対立項が見られる
- ⇒スキュレとカリュブディスはそれら対立項の象徴
- ・ブルームはスキュレとカリュブディスであるスティーブンとマリガンの間を抜ける
=彼らは支配者(イギリス)と被支配者(アイルランド)というある意味対立項に位置する
- ⇒ブルームはその間を抜けることで議論に巻き込まれることない
=対立を乗り越えるのはその両者の間を抜けるしかない

マッキントッシュの男

- スティーブンはシェイクスピアは亡霊として作中に登場しているというがユリシーズでジョイスは登場しているのか？
- ⇒墓地(=死のイメージの場所)に登場したマッキントッシュの男がジョイス？

物理学とユリシーズ第9挿話

- ラッセルの主張する神秘主義は絶対的な視点 = 神を想定した文学批評である
- ⇒視点を観測者とするとは物理学上で絶対的な観測者の時間、空間を基盤とする”ニュートンの古典力学的”である
- 一方、アインシュタインの特殊相対性理論では光の速度のみが不変であり、時間、空間は観測者によって変化する相対的なものであると説く ⇒物理学とは観測者に由来する”主観的”なものである
- ⇒読者 = 観測者であり読書とは相対的、主観的なものでありスティーブンの説は”アインシュタイン的”である
(ジョイスとアインシュタインは時代的にも近い)

シェイクスピアがユダヤ人であることの証明(p349-350)

スティーブンの論理

- ・近親相姦が多い民族⇒強欲である(聖トマスより)
 - ・ユダヤ人は近親相姦が多い⇒ユダヤ人は強欲である(中世以降の貸金業)
 - ・シェイクスピアは妻や女の独占欲が強く、強欲である
 - ・従って、強欲なシェイクスピアはユダヤ人である
- 。。。高校数学でいう必要・十分条件でいうと、近親相姦が多い人は強欲であるが(十分条件)、強欲であることは近親相姦が多い民族の一つの特徴(必要条件)であるため厳密にはスティーブンの論理は不適切である

原罪、亡霊

第9挿話に関わらずユリシーズ全編にわたるテーマ

第9挿話ではシェイクスピアの原罪

=妻アンにライ麦畑で押し倒されたこと、性的劣等感がメインに語られたが

他の挿話では

スティーブン：母の死の床(カトリックかいしゅう)、買春(若き日の芸術家の肖像?)

ブルーム：ルーディの死、性病、妻に対しての性的不能

などなど物語の根底にあり